

大豆 ハスモンヨトウについて



図1 成虫（体長約15～20mm、(左)雌、(右)雄）



図2 葉に産卵された卵塊から孵化した幼虫



図3 老齢幼虫（体長約40mm）



図4 大豆株の白変葉

1 生態

ハスモンヨトウの幼虫は極めて広食性であり、ダイズをはじめ野菜、花き、果樹等多数の作物に被害を及ぼす。成虫は体長約15～20mmで、羽には斜めに数条の淡褐色の縞模様がみられることが特徴である。

卵は数百個の卵塊として葉に産みつけられ、薄茶色の雌成虫の鱗毛で覆われている。雌1頭の生涯産卵数は1,000～3,000個で、数百個ずつ数回に分けて産卵する。1～2齢幼虫は、卵塊周辺の葉裏に群がって摂食する。葉の表皮を残して食害するため、被害を受けた葉は透けて白く見え、いわゆる白変葉となる。3齢以降の幼虫は分散し、葉脈や葉柄を残して葉を食べ尽くす。5～6齢幼虫になると体長40mm程度となり、日中は地下浅いところや下葉の裏にかくれ、夜間に出て食害する。老熟幼虫の摂食量は多く、全幼虫期間の約95%を占め、葉のほか莢も食害する。

幼虫による食害は露地栽培で11月上旬、施設栽培では11月下旬まで続き、加温された施設内などでは冬期も活動を続ける。

本県における発生は年4回程度と推測される。1世代に要する期間は、25℃条件下では卵約4日、幼虫約19日、蛹約14日、産卵前期間2日で計約40日程度である。

本虫は暖地系の害虫で、休眠性がないため、本県では屋外越冬はできない。このため、施設内での越冬や、越冬可能な暖地からの長距離飛来が主な発生源となる。

2 発生状況

発生量は年次によって著しく変動するが、春から降雨が少なく、暑さが厳しい年には秋に多発する傾向がある。野外での成虫発生は、5月からフェロモントラップへの誘殺が認められ、7月中下旬頃に増加のピークがあり、8月中旬から急増して9月上中旬にピークが見られた後、10月下旬に誘殺数が最大となる。なお、本県誘殺データでは、フェロモントラップによる7月の誘殺ピーク値が高い年は、9月以降の発生量が多くなる傾向がある。

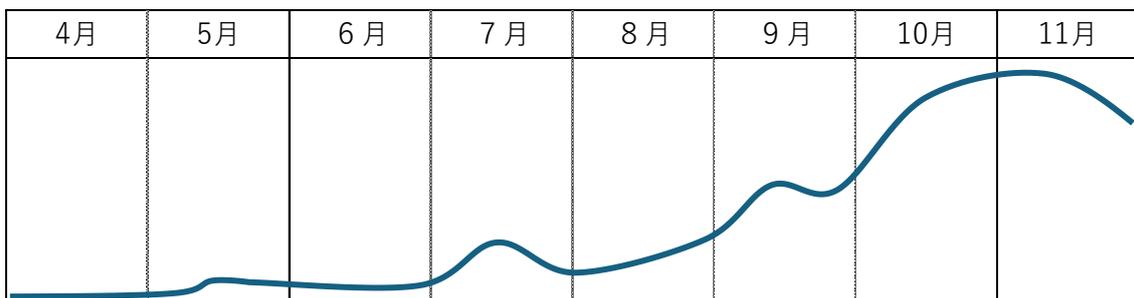


図5 ハスモンヨトウ成虫の発消長

3 防除対策

(1) 発生状況の確認

幼虫の発生量は、風向や周辺地域の越冬量などの地理的な条件により影響を受け、風向も年により変動することから、地域や圃場ごとに発生量は異なるため、定期的にはほ場の見回りを行い白変葉の早期発見に努める。なお、岐阜県病害虫防除所ではフェロモントラップへの誘殺状況調査を実施しており、防除の参考とされたい。

(2) 薬剤による防除

幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が劣るため、若齢幼虫期の防除に重点を置く。白変葉が散見されるようになったら直ちに防除を実施する。なお、薬剤抵抗性の発達を防止するため、同一系統薬剤は連用しない。

一度防除した圃場でも、成虫が飛来して産卵するため、引き続き発生に注意する。